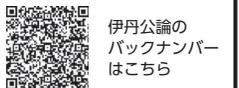


# 郷土研究 伊丹公論

復刊 第42号 通巻61号

年3回発行

発行所 伊丹市立図書館ことば蔵  
〒664-0895 伊丹市宮ノ前3-17-4  
Tel. 072-784-8170  
編集 伊丹公論編集委員会



## 松永K三蔵さんの講演会

### 「本つてこんなにもオモロイでー」



令和7年(2025)9月28日(日)図書館本館ことば蔵で、昨年『バリ山行』で第171回芥川龍之介賞を受賞した松永K三蔵さんの講演会「本つてこんなにもオモロイでー」を開催しました。

本講演会は、「コロナ禍以降に図書館を利用されなくなった方や、図書館を利用することがない方に向けて、図書館を利用していただくための起爆剤となる企画をしたい」ということで、実現した企画です。

松永K三蔵さんが来てくれるのか!という他の図書館職員の方々の視線を浴びながら、担当者が物怖じをせずに松永さんにコンタクトをとることに……。松永さんからは「ぜひ、お引き受けしたい」と言っていた担当者は狂喜乱舞したのでした。

当日は、248人の方に講演会を聴講いただくことができました。SNSなどでも「本の面白さを再確認できた」「ことば蔵に初めて来たが、めっちゃ良い!」「出版不況とか読書離れ

がホントかかって疑うほど人多かった」という声が投稿されるなど、松永さんのお話も、ことば蔵も大変好評でした。

松永さんは昭和55年(1980)茨城県生まれ。関西学院大学文学部を卒業。令和3年(2021)第64回群像新人文学賞優秀作「カメオ」でデビューし、令和6年「バリ山行」で第171回芥川龍之介賞を受賞されています。「バリ山行」は、ご自身の趣味でもある登山を題材にして執筆された山岳小説で、長い芥川賞の歴史の中でも山岳小説が受賞したのは初めての快挙でした。そして、単なる山岳小説と異なるところは、会社経営の浮き沈みや、その中で働く社員

の動きをリアルに描写されているところ。その描写はサラリーマン作家の松永さんならではです(現在は、松永さんは芥川賞受賞式でも話題になった「オモロイ純文運動」Tシャツを着用し、難解と見られがちな純文学のおもしろさに気付いてもらうべく、日々執筆活動をされています。純文学の定義は様々ですが、「世界・人生・人とは何なのか」という本



ことば蔵講演会での松永K三蔵氏



ことば蔵作成の講演会オリジナル本のしおり

は、専門作家)。松永さんは芥川賞受賞式でも話題になった「オモロイ純文運動」Tシャツを着用し、難解と見られがちな純文学のおもしろさに気付いてもらうべく、日々執筆活動をされています。純文学の定義は様々ですが、「世界・人生・人とは何

なのか」という本格的な見方をしていますが、出版社

格好をされていますが、出版社

格好をされていますが、出版社

格好をされていますが、出版社

## 伊丹公論を休刊いたします

平素は「伊丹公論」をご愛読いただき誠にありがとうございます。本紙は、今号復刊第42号(通巻第61号)をもって休刊するという一区切りを迎えることといたしました。

伊丹市の図書館は、もともとこの宮ノ前の地に著述家であり図書館人でもあった小林杖吉氏が私塾『三余学寮』を開き、併設した私設図書館が始まりです。昭和11年に『郷土研究伊丹

公論』を創刊し昭和15年の第19号まで発行されました。14年前、この宮ノ前の酒蔵跡にことば蔵が建てられ、その一周年記念として平成25年(2013)に本紙を復刊しました。地域の郷土紙としての視点を継ぎ「郷土土産品紹介」「現代人物風景」「伊丹俳壇歌壇」「酔語録」などを復活させた上で新たな記事を時代に合わせ加えてきました。その積み重ねは、郷土紙として確かな意味を持つものであったと確信しています。本紙の復刊数は42号となり小林杖吉氏の発刊数の倍以上となっています。伊丹の史跡紹介



復刊第1号1面

ちや素敵!」とお墨付きをいただいた、ことば蔵作成の講演会オリジナル本のしおり」をプレゼントしました。色々と職員で考えながら実現した書店連携企画は、市民の皆さんの読書推進に少しは寄与することができたかなと感じています。松永さんのX(旧Twitter)に、図書館ことば蔵を「素晴らしい施設です!」と、市内外に伊丹市立図書館をPRしていただきました。ということで、芥川賞作家の松永K三蔵さんにもお褒めいただいた素晴らしい施設である本館「ことば蔵」と伊丹市立図書館各館を引き続きよろしくお願ひいたします。ご来館お待ちしております!

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉(筆名「丹城」)が、昭和11年(1936)1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。

# 「音楽行」の電車に乗った日

## 第13回日本一短い自分史大賞に愛知県稲沢市の菱川さん

ことば蔵はこのほど「人生の岐路」をテーマに募集していた「日本一短い自分史」の大賞に、愛知県稲沢市の、菱川町子さん(81)の自分史「音楽行」の電車に乗った日」を選んだ。



日本一短い自分史の募集は平成25年度にスタートし、13度目となる。市内外から466作品の応募があった。審査員は伊丹大使

の坪内稔典・市立伊丹ミュージアム名誉館長、湯浅俊彦・追手門学院大学図書館長、中周子・田辺聖子文学館長の3人。秀作入賞者は、神奈川県横浜市の日垣朋果さん(17)、埼玉県さいたま市の吉村史年さん(53)、東京都新宿区の今津恵保さん(69)の3人。大賞作品の全文は以下のとおり。

小学校五年生の時担任だった駒田先生に出会わなかったら私の人生は全く違ったものになっていただろう。八十一歳の今、振り返れば人生の岐路は十一歳のある日に決まったのだと断言できる。

山に囲まれたひなびた田舎の学校に、新任の先生がやって来た。その先生が五年生になった私の担任になった。先生は音楽が好きで授業が終わるとピアノを弾いてくれた。初めて聞く「エリーゼのために」にうっとり。クラスの友達と一緒にピアノの周りに集まって何度も何度も弾いてくれるようにせがんだ。

そんなある日、最後まで残っていた私に先生が言った一言が、私の運命を決めたのだ。「寺西、ちよつとピアノを弾いてみるか?」

ワクワクしながら先生の教えしてくれたように弾いたらできたのだ。先生に褒めてもらったのが嬉しくて、次の日から暇さえあれば学校のピアノを弾くようになった。それまで遊びと言えど山の中を走り回って笹百合を取ったり、田んぼに一面に咲くレンゲを摘んで花飾りを作ったりしたものだ。土筆、蕨など草花がおもちゃであり友達だった。そんな田舎の女の子が突然ピアノに夢中になった。

その勢いは留まることをしらず、遂にピアノを習いたいと母にねだるまでになった。もちろん家にピアノはない。練習は学校のピアノで、レッスンは自転車とバスで二時間かけて町まで行くのも厭わなかった。中学校でも高等学校でも学校のピアノでひたすら練習した。遂には教育大学音楽科を受験し合格。卒業して三十余年間、いつの間にか駒田先生の後を追いかけて、子供と共に音楽を楽しむ教師になっていた。在職中合唱指導に目覚め、夏休み返上で練習にのめり込んだ。尾張地区大会で優勝

した時、子供の歓声の中で流した涙は私の宝物である。あの日から八十一歳の今日まで「音楽行」という電車に乗って走り続けてきたことに悔いはない。駒田先生に感謝するばかりである。

菱川さんは「書く楽しさに目覚め、手当たり次第に応募した。下手な鉄砲も数撃ちや当たるは本当だった。思いがけず身に余る賞をいただき当分やめられない。」と話してくれた。  
(交流事業担当)



# 伊丹見聞録 紙芝居で交流を

## 紙芝居ひまわり・みさちゃん

(NPO法人A&C. P芸術文化振興会所属)



伊丹市内で小学校や公共施設で紙芝居の実演や創作活動を続けている渡辺美左子さん。写真に紙芝居をしていて心に残っていることを尋ねると、こんな答えが返ってきた。

電車の中でずづついていた2歳ぐらいの女の子に、たまたま持っていた伊丹紹介の4枚の自作のミニ紙芝居を見せると、言葉は分らないようだがイラストが気に入って、特に伊丹のマスケットのたままると興味津々になってくれた。また、ある公園では、おばあちゃんが孫の子守をしながら母親の帰りを待っている時、持って来た紙芝居を見せると、孫がジッと見入ってくれたお陰で子守が楽になったとても喜んでくれた。

紙芝居は、見知らぬ者同士の交流の手段として大事なツールであることを認識されたという。その渡辺美左子さんは、高校教師をしていた時に、生徒のグループ活動の一つとして、紙芝居を製作するグループがあった。そのグループが完成させた作品のすばらしさに感動し、自分も作りたい!と思った。また、20年間演劇部の顧問をしていたので、生徒たちの練習する姿を見て、声を出すことの爽快なことはよくわかっていった。

今は、夫の両親の介護、実家の両親の介護も終え、4人の親を見送ることもできたので、念願の紙芝居活動に力を入れるようになった。ことば蔵や、他のイベントでミニ紙芝居作りのワークショップをしたり、保育園、小学校、公共施設での紙芝居ライブをしたりして活動を広げているが、渡辺さんが初めてこ

いた時、子供の歓声の中で流した涙は私の宝物である。あの日から八十一歳の今日まで「音楽行」という電車に乗って走り続けてきたことに悔いはない。駒田先生に感謝するばかりである。

菱川さんは「書く楽しさに目覚め、手当たり次第に応募した。下手な鉄砲も数撃ちや当たるは本当だった。思いがけず身に余る賞をいただき当分やめられない。」と話してくれた。  
(交流事業担当)

### 伊丹俳壇

「兼題なし」坪内稔典 選  
(市立伊丹ミュージアム名誉館長)

どこまでも色のパレット秋の朝  
廣澤 真希(川辺郡猪名川町)

「色のパレット」という表現がすてき。明るい秋の朝が目に浮かぶ。また、「どこまでも」という形容も秋の朝の広がりをうまくとらえている。俳句は「575の言葉の絵」になると秀句になる。この句のように。

### 優秀賞

旅先はどんぐりの街青信号  
睦月くらげ(埼玉県新座市)  
消灯し宇宙となりし刈田かな  
平松泥沸(伊丹市)  
ごく稀にぶどうも恋をするらしい  
雨森茂喜(大阪府大阪市)  
どんぐりや赤いバケツに五つ六つ  
竹中佳子(伊丹市)  
はいチーズ九十八歳秋麗  
知地一代(伊丹市)

### 伊丹歌壇

「自転車」尾崎まゆみ 選  
(玲瓏)編集委員。神戸新聞文芸  
短歌選者。現代歌人協会会員)

最優秀賞  
自転車を星座にすれば  
半日をかけてあなたの家までゆける  
袴田 朱夏(京都府京都市)

星をつないで自転車座をつくるのだから、発想が楽しい。瞬間移動できそうだが「半日をかけてあなたの家まで」が妙に具体的なので、あなたへの想いも具体的に星の隣りとなってくつきりと夜空に見えてくる。

### 優秀賞

思い出の形骸だろうか透きとおる浅瀬にねむる放置自転車  
みつき美希(大阪府大阪市)  
逃げ水を追いかけてベダル踏み込めば風よりうるさい心臓の音  
芍薬(千葉市美浜区)  
逆風に慣れていなくて自転車のベダルが重い海への青さ  
大野美波(埼玉県入間市)  
星月夜いつかグリムの兄弟が森に忘れていった自転車  
ヨシダジャック(奈良県天理市)

独り身の冬の淋しさ込み上げる錆びた自転車キコキコ漕げば  
八島和也(伊丹市)

このたび諸般の事情により『伊丹公論』は復刊第42号をもちまして休刊することになりました。これに伴い、長年にわたり親しまれてまいりました伊丹俳壇および、伊丹歌壇につきましても同号をもって終了とさせていただきます。伊丹俳壇・伊丹歌壇は、多くの皆さまのご投稿とご支援により育まれてまいりました。これまでご投稿、ご協力を賜りました皆さまに、心より御礼申し上げます。



現代人物

風景

水曜日の午後、エフエム  
いたみのスタジオから流れ  
てくる、やさしく明るい声。  
その主は、ラジオパーソナ  
リティの山田由香里さんだ。  
毎週水曜14時から15時50分  
まで生放送されている「ハ  
ッピーアフタヌーン」を担  
当し、今年で5年目を迎える。

やさしい声がまちをつなぐ—山田由香里さん

事をしながら聴く人、車を  
運転しながら聴く人など、  
それぞれの場面を想像しな  
がら語りかける。生放送中、  
ガラス張りのスタジオ前を  
下校する子どもたちが手を  
振ってくれる光景は、何よ  
りの励みだという。番組の  
中でリスナーさんとやりと  
りする話題も、日々の暮ら  
しに関することから地球環  
境まで、さまざまある中、  
できるだけ短く、わかりや  
すく、安心感のある言葉で  
語りかけることを大切にし  
ている。

市民が主体となり、多様  
なイベントが生まれる伊丹  
のまちは、山田さんにとっ  
て大きな魅力だ。現場に足  
を運び、人と出会い、つな  
がりを育むことこそが、地  
域密着の原点だと語る。

また、声で伝えることを  
大切にしている山田さんは  
「いたみキッズハーモニー」  
の運営にも取り組み、少年  
少女合唱団を通じて、歌う  
楽しさと声の力を子どもた  
ちに伝えている。これからも  
より多くの子どもたちと歌  
える場を広げていきたいと  
いう。



写真協力 西田写真館

田さんの声は、自  
然とこちらから話  
したくなる不思議  
な力をもっている。  
ハッピーエフエム  
いたみのホームペ  
ージからは全国で  
聴取可能だ。ぜひ  
一度、その声にふ  
れてみてほしい。

(KUMI)

郷土 幸せ運ぶタルトとパフェたち。

土産品紹介 カフェ・カキツバタが届ける幸せは続く。胃袋から心まで。その先へ。

パフェ。フランス語の *Pâtisseries*  
(パルフェ) が由来であり、「完璧」  
「完全」という意味を持つ。ピ  
カピカひとつのガラスの中に、  
季節の果物やアイスクリームと生  
クリームたちが合わさり、完璧な  
おいしさを作りだしている。そし



落ち着いた店内の様子



苺のパフェ2種

て、パフェを食べるときのわた  
したちは、いつだつとびきり  
に笑顔。きっとそれがパフェで  
ある。  
宮ノ前、ことば蔵から阪急伊  
丹駅の方向に歩いて1分ほどの  
場所にタルト専門店「カフェ・

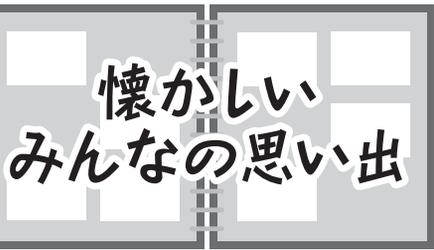
カキツバタ」は佇む。宮ノ前ら  
しい漆喰の美しい建物に刻まれ  
ているのは、お店の目印となる  
カキツバタの花とツバメが指輪  
を成す紫のモチーフである。燕  
子花という漢字から燕をイメー  
ジし、「お菓子が幸せを運びよき  
ご縁となるように」という願い  
を込めたそう。

昨年、梅雨ごろよりカフェの  
聖地・大阪中崎町にあってあつ  
た人気のカフェ・キンモクセイの  
歩みの先に生まれたのが、カ  
フェ・カキツバタである。「ゆっ  
くり味わってほしくて、落ち着  
いた場所を探していました。」と  
話す石田さんに、伊丹・宮ノ前  
の景観が共鳴したそう。店内  
1階ではショーケースに並ぶお  
菓子を購入でき、2階はくつろ

げるカフェとなっている。  
カフェ・カキツバタはタルト  
専門店であるが、注目していた  
だきたいのはパフェである。カ  
キツバタのパフェは、深いグラス  
にアイスクリームと生クリーム  
が入って…という「パフェのイ  
メージ」的なものは少し違う。  
例えば、グラスを仕切った上側  
にミルフィーユ、ブリュレやモン  
ブラン等のケーキが鎮座し、グ  
ラスの中にアイスクリームや生  
クリームが入るといったものが  
ある。他にも、丸ごと大きな果  
物が入るものやグラスの中にた  
くさんの種類の果物があるもの、  
ジュレやマカロンが入るものな  
ど…の構成で1つのパフェが  
様々な表情を魅せるつくりと  
なっている。パフェのメニューは  
全て期間限定で、春は苺、夏は  
パイン、秋は栗、冬はみかん…  
というように四季と共に巡って  
いる。また、さくさく、ぱりぱり、  
ふわふわ、なめらか…といった

様々な食感を散りばめることも  
大事にしているそう。まさしく、  
「Pâtisseries」ではなからうか？  
ちなみに、お店2階の内装は  
オーナー夫婦で手掛けられて  
おり、お菓子以外にも手作業の  
あたたかさを感じると伝わる  
空間となっていた。「気持ちい  
えない粒となって、相手に伝わ  
ると思います」と話す石田さん  
のすてきな笑顔が印象的であつ  
た。

今後は、伊丹の地ものを使つ  
たお菓子も作ってみたいとのこ  
と。また、平日、特に水曜日は  
ひとりのお客様も多いようで、  
店内が空いていれば本を読みな  
がらゆっくり過ごして良いそう  
だ。甘党読者のみなさまはこと  
ば蔵の本を片手にぜひ。  
カフェ・カキツバタのお菓子で、  
自分や大切な人へ、幸せを  
運んでみてはどうだろうか。よ  
きご縁を結ぶよう祈っている。  
(長生侑蒔)



懐かしい みんなの思い出

我が街伊丹に王冠を製造していた会社があった



伊丹で作られていた王冠の一部

我が街伊丹に王冠を製造して  
いた会社があったことを知る人は  
少なく、過去の事となりました。会  
社は尼宝線沿いにあり、今は商業  
施設となっています。

当時は瓶ビールが良く売れて、  
王冠もよく売れました。市役所や  
商工会議所の1階ロビーには  
ビールやジュースの王冠、伊丹の  
酒造会社のアルミ広口キャップ  
などの見本の品が数多く陳列し  
てありました。

会社の正門を入ると右手に日  
本では珍しいコルク樫の木が一  
本と桜の大木がありました。春の  
満開の頃は花見で一杯と思ひ出  
深いです。二か月に一回会社費用  
で終業後にビールデーという飲  
み会とカラオケ会があり、一泊で  
行く慰安旅行を楽しみにしたも  
ので、50人程のアットホームな会  
社でした。

ここで製造していた王冠について  
少し述べてみます。王冠は189  
2年にアメリカ人ウイリアムペイ  
ンター氏がガス飲料用の瓶蓋を発  
明しました。

王冠は瓶詰された飲料製品の中  
身の成分が衛生的に品質を保持す  
る為に使用されるもので、栓の事  
です。栓を開けるとポイと捨てら  
れる一個の王冠です。この一個の  
王冠を造るには多くの人の技術と  
苦勞が結集されています。

王冠の天面に絵や文字が印刷さ  
れています。この図案のネガを作  
りフィルムに焼き付けて印刷ネガ  
をつくり、ブリキ板に印刷します。  
印刷されたブリキ板にインクがは  
がれないようにニスを引いて高温  
で焼き付ける。そのブリキ板をプ  
レス機で打ち抜いた王冠をシエル  
といいます。次工程はシエルの中  
にポリエチレン(PE)という樹脂

のペレットを供給し、シエル内面  
に強く融着させ、瓶口に合わせる  
形状を成形します。成形された王  
冠はベルトコンベアーに流れてい  
き検査員が目視で成形が崩れてい  
いか、天面印刷に曲がりがないか  
検査します。次は品質管理の抜き  
取り検査、性能検査、微生物検査を  
終えて、はじめて合格となります。  
そして計数機で数えられて一箱5  
千個の製品が出来上がります。

その昔はコルク樫の樹皮を砕い  
て棒状の圧縮コルクジスに、し  
薄くスライスして使用していまし  
た。

皆さんは王冠の装(スカートと  
いう)が何個あるか数えたことが  
ありますか、27個の王冠のスカ  
ートの数は万国共通で21個です。王  
冠が発明されて130年ヒダ数は変  
わっていません。  
★なぜ21個か？

- ① 27個の王冠のサイズと形からヒ  
ダ数は20くらいが好ましかつ  
た。→加工上の理由
  - ② 例えば旋盤で丸棒を3本爪で掴  
むように、ものをつかむのは3  
点指示がいい。→3の倍数が  
好ましい。
  - ③ このような理由で20に最も近い  
3の倍数である21になったのでは  
ないかとあくまでも後日の推理で  
す。
- 伊丹市で製造した王冠は、茨木  
市に在ったビール工場に運ばれ瓶  
ビールとなり多くの方の喉を潤し  
ました。今はそのビール工場もな  
くなり、その跡地は大学のキャン  
パスになっているそうです。  
ただキャンパスの中にはその  
ビール会社の系列のビヤホールが  
あり、今でもビールを楽しめるそ  
うです。

(岡村アサ子)

### 蔵出しニュース

## 伊丹ゆかりの芥川賞作家

ことば蔵には、一階ロビーにある階段を上ると、落ち着いた雰囲気のある伊丹作家コーナーがある。そこでは、伊丹市ゆかりの芥川賞作家である田辺聖子氏と宮本輝氏の作品や資料が常時展示して



ことば蔵 伊丹作家コーナー



田辺聖子氏と宮本輝氏の作品

サルトル・ボーヴォワール賞を受賞したことが書かれている資料が展示されている。サルトルとボーヴォワールもその契約結婚や自由恋愛において社会へ影響を与えた二人である。また、当館所蔵の田辺さんの色紙や写真なども展示してあり、伊丹市に居を構える際に家の設計施工を請け負った会社の社長に寄贈した「幾山河 生きて伊丹に 家さだめ」と書かれている俳句と地鎮祭の写真で、名誉館長を就任頂いたことば蔵にとつて貴重なもので、ご遺族から寄贈頂いた物である。ちなみに地鎮祭の写真には、「カモカのおつちゃん」のモデルである川野純夫さんも映っている。(復刊第40号記事掲載)

宮本さんについての展示は、宮本さんの母校である追手門学院大学の宮本輝ミュージアムからお借りしたもので宮本さんの描くヒロインたちにかかわる資料である。是枝裕和監督と江角マキコさんの映画デビュー作でありヴェネチア国際映画祭で金のオゼツラ賞を受賞した「幻の光」に関する展示物と神戸を中心に阪神間を舞台にした「花の降る午後」の映画化された作品に関する物や各国で翻訳され英国人演劇家のジョン・ケアード氏によって舞台化された「錦繡」に関するものが展示中である。また、お二人は多作の作家でありその多くの作品も展示してある。

田辺聖子文学館と宮本輝ミュージアムの協力のもと年に一回テーマを決めて展示内容を更新しているのは非見学に訪れていただきたい。コーナー内ではお二人の作品をお読みいただけるのでお二人を感じながら読書するのも特別な時間になるのではないだろうか。もちろん借りて読みたい方は、図書館3階のカウンターで借りられることをお忘れなく。

## 第2回 いたみアーカイブ 有馬道「今に残る「有馬道」を探して」



有馬温泉観光交流センター付近にある行儀菩薩像

伊丹市民に慕われている行基さんだが、有馬温泉の衰退の危機を救った伝説があるのをご存知だろうか？  
伊丹で池や寺をつくりながら、民衆に仏教を布教していた僧・行基が、道中で出会った病者に対し、食事や治療の世話をしたところ、薬師如来となって温泉を開くように告げたそう。これは、有馬温泉の公衆浴場「金の湯」と「銀の湯」のほぼ中間にある温泉寺の由来となっており、「有馬温泉寺縁起絵巻」に描かれている。温泉寺の前にある有馬温泉観光交流センターには行基を称える像が奉られている。

尼崎市の神崎方面から伊丹市内の伊丹郷町または昆陽を經由し宝塚市の小浜、生瀬をたどる有馬道は、かつて、物資や湯治客を有馬温泉に運ぶ正規のルートだった。江戸幕府が御用通行を円滑に行うことを目的に、街道政策として宿駅業務を地域に課し、住民が「伝馬役」として人馬を負担していた。宿駅業務は、明治新政府にもいったん引き継がれたものの、貨客の輸送量増大に対処しきれず、やがて制度は廃止されることとなった。明治以降、有馬温泉へ向かう旅は、道路や鉄道網の発達による交通インフラの整備が寄与することとなり、伊丹市内を走る阪急電鉄は、かつて「箕面有馬電気軌道」との社名にもあり、有馬温泉までの路線を敷設することが計画されていた。しかし、宝塚から有馬の間は六甲山脈の峻険な山岳を縦貫しなければならぬ難工事であったこと、多額の資本を投資しなければならなかったことから、大正二年には軌道敷設権そのものを放棄することとなった。今は阪急バスが、その名残として、宝塚から生瀬橋・船坂を經由して有馬までの路線を運行している。

## タンジョー先生 はじめよう



林やよい 伊丹市在住。毎日新聞兵庫県版にイラストエッセイ「新くるまいる」連載中。



開山が行基とされる有馬山温泉禅寺

もちろん、この時代であるが、参加者は男性のみ。先日、第17回目が開催された。(拙者は第12回から参加) 地元のみならず、市長もトップ会員だが、今回は欠席。男12人で苦勞を分かち合いながら、元気にたふち飲んだのは言うまでもない。



副業で今年度お伺いしている福井県小浜市で、新名物だという「鯖ンバ」をいただいた。脂のノった鯖を甘辛く煮つけて、ふんわりほぐしてトッピングしたもの。(写真 焼き鯖に錦糸たまご、ネギやガリが入って、上に「柑なんば」といって、これも小浜名物で柑橘系の「獅子ゆず」をブレンドした唐辛子。



鯖ンバ

絶対にキリンビール、何処へいってもキリンビール、その他のビールは飲まない主義の友達がいいた、日本酒も決まっており豪快に飲む女友達。また、お

こまめに水飲んでいきますよ  
「コスモス、黄  
(平きみえ)

元おかみの きまぐれコラム  
よく呑んだ日々

店をしているときよく来てくれた当時の市長も飲んでいるときは市長と呼ぶのはなんだかと、「つとむちゃん、つとむちゃん」と呼んで楽しい時間を過ごしたことが有りました。桜の下で夜桜を楽しんで乾杯。冬は、今は無くなった伊丹シティホテルで忘年会、多くの人が集まってカラオケ大会。この時も「つとむちゃん」が一番上手だった。市長をやめられてから、今もカラオケに行っておられるのか？